

インドネシア中近世港市バンテンの社会構造と都市機能 The Social Structure and Urban Function on Banten, the Indonesian Port City at the Middle-Modern Ages

坂井 隆 SAKAI Takashi

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 主幹専門員
The Gunma Archaeological Research Foundation
executive specialist

We were did several jointed research with Indonesian National Archaeological Center on methods of archaeology, ceramology and anthropology. From Age.1997 to Age.1999, could got many data in this West Java's area by both excavation on Tir tayasa site, numerous artifacts of ceramic shards from Banten Lama site and a megalithic site of Lebak Cibedug.

According to those research, we could thought that human activity of Banten, a large port city in Southeast Asia on 17th century, were founded on two important elements; the global maritime trade, especially Japanese and Chinese ceramics and the traditional thinking forward to the hinterland.

1 研究目的

交易の十字路口として歩んできた東南アジア群島部の都市の多くは、港としての役割が強い港市である。そこに居住する人々は多民族であり、社会的役割を異にする各民族社会の融合体として特異な構造が歴史的に存在した。とりわけイスラム教伝来以降、その柔軟な社会構造はさらに世界史的にも希有のグローバルな開放的性格を帯びている。

バンテン（インドネシア・ジャワ島西部）は、17世紀を中心に栄えたこの地域最大の港市である。19世紀以降廃墟となったこの港市遺跡の考古学的発掘調査は、過去24年間インドネシア学界を挙げて行われているが、港市の物的解明に世界的な注目を受けてきた。

しかしこれまでの調査は、資金的・技術的に多くの問題を抱えており、未だ社会構造・都市機能を十分に明らかにするには至っていない。とりわけ、ここで大量に出土する日本の肥前磁器分析の問題、そして都市遺跡発掘調査のさまざまな技術的障害の解決については、インドネシアの研究者自身、内部だけでは進捗が容易ではないことを認識している。

そのため肥前磁器を中心とする出土陶磁器の分析を時間軸の基礎としながら、港市という都市環境をめぐって都市考古学・民族学などの種々

の要素を学際的に再検討し、今後の共同研究発展の土台を築き上げることを企図して、日・伊共同研究実施を試みた。

2 研究経過

97年8月から10月にかけて民族・考古・陶磁の3班に別れインドネシアでの調査を行い、日本から前後8人が訪伊して、インドネシア側の協力者8人と共に初年度の共同調査を実施した。

98年8月から第二年度の共同調査を行うべく試みたが、インドネシアの政変と重なり大きく当初の計画とは異なったものにならざるをえなかった。同年に実施できた調査は、民族班のものだけだった。

政情の安定に伴い、延期した考古・陶磁班の第二次調査を99年7・8月によりやく実施した。

3 研究成果

3-1 民族調査

概要 本調査は、港市バンテン成立の根源をなす在来文化的背景の状況把握のために行った。

97年8月に行ったバンテン後背山地にあるレバツ・チベドゥツ遺跡踏査は、日本人として初めて巨石文化のこの遺跡を調べることができた。またこの遺跡の文化史的背景を探るため、同じ山中に孤立して生活するバドゥイ人の集落

への接近を試みた。

第二年度にはレバッ・チベドゥッ遺跡について、正確な測量による実測図の作成を目指して日本から4人の調査班の派遣を計画した。しかし、インドネシアの政情不安のため、測量作業は断念せざるをえなかった。

成果 遺跡は20世紀はじめPriveによって発見され、オランダの考古学者ファン・デル・ヒョープによって紹介された石積基壇遺構である。1932年に出版された『南スマトラにおける巨石記念物』ではじめてこの遺跡の見取り図が掲載されている。その後、ハルワニ氏が来訪し、簡単な略図を報告している。

遺跡はインドネシア・西ジャワ州レバッ県チトレック村チベドゥッ集落にあり、現在この遺跡を含む周辺地域は国立公園に指定されている。

今回の調査目的はこの遺跡の確認調査とその周辺地域に同様な遺構が存在しないかを確認することである。調査は、巨石記念物である石積基壇遺構の清掃と周辺地域の伐採が主なものであったが、従来から知られていた遺構以外に井戸を含む拝所、埋葬遺構でないかと考えられる広場、メンヒル、ストーンサークルなどをもつ遺跡であることが明らかとなった。

東西方向を主軸とする石積基壇遺構のあるマウンドは川より約10mの台地上で、全長100m x 幅60mの台地には7壇のテラスと階段状ピラミッドがある。入口の階段脇にはすべてメンヒル(約1.5m)が門柱のように立てられていたと考えられる。現在は頂部にあるピラミッド各壇の四隅に高さ約60センチほどのメンヒルが立てられている。

階段状ピラミッドは底辺19m x 18.5m、頂部5.3m x 4.4m、高さ6~7mである。各壇の高さは70~90cmを測る。全体が8壇か9壇であるかは最頂部が木の根で壊されているので確認できない。しかし、インドネシアでの石積基壇遺構がほとんど奇数であることから9壇であったのではないかと考えられる。

伐採・清掃の結果、石積基壇遺構の東側に新たにメンヒルを発見し、9壇のピラミッド状基壇を取り囲むようにメンヒルが東西南北に一本ずつ配置されていた。

周辺の分布調査では、周囲3~4キロメートルに4カ所、合計9遺構を見ることが出来た。遺構は全てブッシュで覆われ全貌は確認できないが、方形のテラス(大規模のもので17×15

m)の中央にメンヒルをもつものや、石組みの四隅にメンヒルを持つものなどがある。

メンヒルはほとんどが倒れており、最近復元されたものもある。興味深いことに、これらの遺構が全てレバッ・チベドゥッ遺跡の主軸と並行している。これらは、同遺跡を築いた人々と関連する遺構であることは間違いないように思われた。



レバッ・チベドゥッ遺跡階段状ピラミッド

3-2 考古・陶磁調査

概要 バンテン王国離宮跡ティルタヤサ遺跡は、17世紀後半に僅か5年間しか使用されなかったところで、時期を特定した都市構造を考える上で極めて示唆的情報を包含している。両年度実施したこの遺跡の発掘調査は、インドネシアと日本間で史上初めての共同調査となった。

バンテン・ラーマの東約18キロのウジュン川の旧河口に近くに位置するこの遺跡に現在残るのは宮殿の一部の塚(高さ3m径30mほど)だけだが、煉瓦の建物跡が現地表にも見え隠れしている。

芙蓉手染付皿を中心とする肥前磁器などの大量の陶磁片を、瓦葺建物跡から検出した。また遺跡の範囲と規模を考える上で重要な意味がある、北側城壁と北東角の基部を検出した。さらに地上に唯一残るマウンドが、遺跡存続時に築造された人工物である可能性も確認した。

陶磁班調査は、最初に93年に実施したバンテン・ラーマの陶磁片調査の継続をした。約30万片の陶磁片の分類・整理により、中国・東南アジアそしてヨーロッパ陶器のバンテンへの搬入について調べることができた。

第二年度ではティルタヤサ遺跡出土遺物の分類・撮影・実測を行い、遺跡のあり方を検討する最初の報告書刊行に向けた調査を行った。

成果

検出遺構 遺跡範囲については、北東側の第2試掘地点で、推定北側城壁の基部（底幅約2m）を検出し、また第4試掘地点では同北東角部と思われる稜堡構造を発見した。前者は、内外面に珊瑚石灰岩塊（約0.6×0.3×0.2m）を走行に直交して並べ、その内部に芯材として煉瓦片などを投じているが、後者は同様の円形構造（径約5m以上）のものである。この発見により、全体規模を推定するための大きな資料を得ることができた。

そこから全体の走行は概ね北西・南東に向かい、方位に近い現況の村有林の形状に対しずれていることが分かった。これは、メッカの方向に沿ったバンテン・ラーマの王宮の主軸と似ていると考えられる。

大量に陶磁器が出土した東側の第1試掘地点では、丹念に組まれた珊瑚石灰岩小塊による礎石地業の一部を検出した。さらに地山削りだし基礎であることも判明した。グリッドの面積に近い大きさの掘乱坑があり、瓦・磚・方形床石が炭化物層と共に出土した。ここは火災にあった瓦葺き建物跡だったと考えられる。なお棟部分に使われた装飾瓦片も確認できた。

現在地上に唯一残るマウンド「グヌン・スウ」（長径25m比高3m）の第3試掘地点では、人工の盛り土であることを確認した。
出土陶磁器 第1試掘地点の掘乱坑から、肥前染付皿類・同鉢類・同クンディ水差し・同合子・青磁皿、景德鎮青花皿・同三彩小杯、ショウ州窯青花皿類・色絵皿など大量に出土した。特に肥前大皿などは、深さ80cmほどの上下から出土した破片で接合するものが多く、この掘乱坑の埋没が短時間であったことを物語っている。ヴェトナム青花の粗製菊花文印花碗も少量見られた。

第2試掘地点では、芯材充填物の中に1650～70年代の肥前染付小皿片と同白磁小皿片が出土した。ここでは、全体に小片が大部分である。なお、陶器ではタイ・ミャンマー産の焼締甕・褐釉瓶さらに黒釉白彩甕、そして肥前二彩鉢片も出ている。第4試掘地点では、同様の在り方で康熙年製銘染付皿あるいは緑彩小皿など景德鎮磁器片の出土が目立った。

出土土器・土製品 容器類の出土は極めて少ない。ただクンディ水差しの注口部片が第2・第3調査地点で出土した。いずれも形状から

17・18世紀頃と考えられる。第3調査地点では、マウンドの盛り土の直下で発見した。

量的に多いのは、第1試掘地点出土の酸化焼成の棧瓦である。またここでは方形の磚が少量見られた。建築材では、煉瓦の出土が多かった。その他出土遺物 六角形の孔を持つ銅銭であるバンテン銭が、第2試掘地点より出土した。

また食用にしたと思われるマドガイ・ハマグリなどの貝殻は、いずれの地点でも存在した。
磁器貿易の問題 肥前磁器が最も集中した第1調査地点の掘乱坑では、主に次のものが見られた。

有田染付芙蓉手大皿（1655～70年代及び1660～80年代の4種類以上）

有田染付墨弾き皿（1660～80年代2種類）

有田染付芙蓉手鉢（1655～70年代）

有田染付牡丹唐草文大合子（1660～70年代）

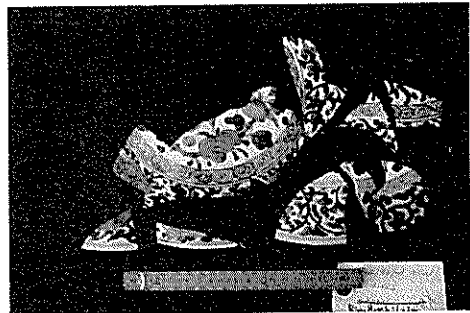
有田染付芙蓉手クンディ水差し（1660～80年代）

波佐見青磁大皿（1660～80年代）

これらは、大部分が同一文様種類のもので複数個体あった。また芙蓉手皿は直径20cm前後と15cm前後のものも多く見られた。ほとんど全ては、トルコのトプカプ・コレクションにあるものと同質のものである点は、興味深い。

共伴した中国磁器では、福建・広東系五彩印判手大皿以外には大皿はほとんどなかった。中国磁器も、17世紀後半の景德鎮菊唐草文青花皿などの直径20cmほどの皿も、同一文様種類のもので複数個体あった。景德鎮三彩小杯・小皿も数が多かった。

同一文様種類の上質の皿類がここに複数個体あったことは、この建物にそれらが数多く貯蔵され、また西アジアなどへ再輸出されようとしていたことを推定させる。



ティルタヤサ遺跡出土肥前磁器染付蓋物

4 今後の課題と発展

4-1 民族調査

レバッ・チベドゥッ遺跡は、従来知られていた階段状ピラミッド以外にストーンサークルを中心とする遺構群があることが分かった。また遺跡中心の石積基壇遺構の東側に新たにメンヒルを発見し、9壇のピラミッド状基壇を取り囲むようにメンヒルが東西南北に一本ずつ配置されていたことが分かった。

周辺の人々と交渉を閉ざしているパドゥイ人の生活も、ドゥリアンなどの商品作物を通じた限定的な外界接触に依存した部分があることを知った。

残念ながら遺跡全体の正確な測量をすることはできなかった。これは遺跡の性格を考える上で最も必要なことであり、今後の調査に期したい。この地域は交通上の不便さもあって、インドネシアの研究者もほとんど手を付けられていない。そしてバンテンの先住民であるパドゥイ人の起源等を考える上にもさらに精密な調査が必要と考えられる。

4-2 発掘・陶磁調査

考古発掘調査は、面積的には極めて部分的な試掘調査ではあったが、ティルトヤサ遺跡の性格を考える上で重要な要素を見出すことができた。地元住民は、村長以下終始この調査に好意的であった。

陶磁調査はバンテンを中心とした世界の陶磁貿易の全体傾向をつかむことができ、またこれまでの発掘によるティルトヤサ遺跡の出土品に対しても検討することができた。

しかし、少なくとも2万平米と推定されるこの遺跡の全容を考えるには、全く微々たる範囲を調査してきたに過ぎない。しかも遺跡地自体は、村民が墓地として使っているため、年ごとに破



ティルトヤサ遺跡城壁北東角部の発掘調査

壊され続けている。この遺跡の性格、特に17世紀後半の港市国家の都市機能を考えるためには、まだ圧倒的に情報は不足している。

さらなる発掘調査の継続ならびに遺跡保護措置が、緊急に必要とされている。

5 発表論文リスト

5-1 著書

1998A. 『「伊万里」からアジアが見える一海の陶磁路と日本』、東京：講談社選書メチエ130

1998B. 『世界の考古学 東南アジア』、東京：同成社（西村正雄・新田栄治と共著）

5-2 論文

1999 「インドネシア、バンテン遺跡出土の陶磁器」、『国立歴史民俗博物館研究報告』82、47～94頁、佐倉：国立歴史民俗博物館（大橋康二と共同）

5-3 報告

1998A. 「インドネシア・ティルトヤサ遺跡の肥前陶磁」『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』、143～146頁、東京：日本考古学協会

1998B. 「インドネシア・ティルトヤサ遺跡の共同調査」『文明のクロスロード ミュージアム九州』61、69～72頁、福岡：博物館等建設推進九州会議

1999A. 「東南アジア港市と日本の中近世都市」、『季刊考古学』66、60～65頁、東京：雄山閣

1999B. 「インドネシア・バンテン遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点」、『第4回国際文化財保存修復研究会報告書』、27～45頁、東京：東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター

1999C. 「南北を結ぶ港市の遺跡」、『考古学ジャーナル』448、25～29頁、ニューサイエンス社

5-4 発表

1999A. 「インドネシア・バンテン遺跡、台湾・左營遺跡」、『17世紀アジアの海上交流—東南アジア出土のイマリー—東京シンポジウム』：上智大学アジア文化研究所

1999 B. *Keramik-keramik ditemukan dari Banten Lama : Pertemuan Ilmu Arkeologi ke-8 Ikatan Ahli Arkeologi Indonesia, Yogyakarta*, インドネシア考古学者協会主催

1999 C. 「東南アジアと日本の港市」、『東南アジアと日本の考古学』：東南アジア考古学会第23回研究大会

1999 D. *Situs-Situs di Asia Tenggara yang Menemukannya Keramik Jepang/Hizen : International Symposium for Japanese Ceramics of Archaeology Sites in South-east Asia : The Maritim Relationship on 17th Century*, Jakarta, インドネシア国立考古学研究センター主催